
理樹と幼馴染とリトルバスターズ

境

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理樹と幼馴染とリトルバスターズ

【Nコード】

N9543Y

【作者名】

境

【あらすじ】

これは理樹とその幼馴染である高宮勝人^{たかみやかずと}を主人公とした物語です。時期は6月ごろという設定で、原作とかみ合わないところがあるかもしれませんがそれでもいいという方は良かったら見て行ってください

プロローグ

『ねえねえ。それはなんなの?』

『これか?これは俺とお前の友情の証だよ』

『友情の証?』

『ああ。これで俺とお前は親友だ』

『親友?』

『うん。つまりもしお前が辛かったり大変だったりしたら俺がお前を助けに行つてやるってことだよ』

『ホント!』

『ああ。嘘なんてつくもんか!』

『それじゃあ勝人が辛かったり大変な時は僕が助けに行くよ』

『約束だぞ?理樹』

『うん!』

?????side

「どこか」

今日から俺が通う学校。生徒は皆既に教室に行っているようで辺りには人が全くいない

「ハア。面倒だな。サボるか・・・」

そう考えていたら声をかけられた

「君が高宮君ですか？」

どうやらこの学校の教師のようだ

「ええ・・・まあ」

「そうですね。もうすぐHRが始まるので急いでください」

そう言つと教師は校舎に向かって歩いて行った。俺は渋々それについて行った

第一話 幼馴染との再会

理樹 side

「あれ誰だろう?。」

僕は今教室の窓から校門の方を見ている。そこには一人の見知らぬ人……ここからだとよくわからないが恐らく男……がいた。うちの学校の制服を着ているようだ

「自宅通いの子かな?。」

うちの学校には寮があるが自宅から通っている人もいる。でもそういう人は大体早めに来るのでこんな時間にまだ校門にいるのは少し妙だった。しばらく見ていたら先生がやってきてその人を連れて後者へと入って行った

「理樹。何見てるんだ?。」

すると不意に声をかけられた。僕はそっちの方向を向く

「おはよう。鈴」

棗鈴。僕の幼馴染で大切な恋人だ

「どっしたんだ?ボーっとして」

宮沢謙吾。彼も僕の幼馴染だ

「ちょっと校門の方を見てたんだ」

「なんだ？なんか面白いもんでもあったのか？」

同じく僕の幼馴染の井ノ原真人。ここにはいないけどもう一人幼馴染がいる。僕らは昔その五人でリトルバスターズというチームを作ったんだけど、最近メンバーが増えて今では十人になっている

「うん。なんか校門に制服を着た見慣れない人がいたんだ。自宅通いの子にしては来るのが遅いし」

「そういえば今日転校生が来るんだってー」

「あつ、小毬さん」

神北小毬さん。リトルバスターズのメンバーの一人だ

「ほう。なら理樹が見たのがその転校生かもしれないな」

「うん。そうだね」

「お前ら席につけ」

どうやら先生が来たようだ。皆席に戻っていく

「えー、今日は転校生を紹介する」

小毬さんの言った通りだ。教室の中で「どんな子だろう」「男の子かな」などといった声上がる

「それじゃあ入ってこい」

ガラガラっとドアを開けて転校生が入ってくる。どんな人かと思いいその人の顔を見してみる

「え？」

その顔を見て僕は呆然とした。だって知っている顔なのだ

『これで俺とおまえは親友だ』

遠い日の記憶がよみがえる

「勝人？」

勝人 side

担任が転校生について行った直後、教室から様々な声が聞こえてきた。転校生と聞いて好奇心がわいてきたのだろう。入ってこいという声が聞こえたので俺はドアを開けて教室に入った。教室に入ると生徒の声が一層大きくなった

(鬱陶しいな)

こつこつと奇異の目で見られるのは好きじゃなかった。正直気分が悪い。騒がしい喧噪のなかでそれらとは全く違った声が聞こえてくる

「勝人？」

呼ばれて俺はそいつの方を見る。そこには気弱そうな、でもどこか見覚えのある顔があった。でも誰なのか思い出せない

「何だ？知ってるのか理樹？」

大柄な男がそいつに声をかける。ん？理樹？その名を聞いて俺はようやく思い出した

「お前、直枝・・・理樹か？」

「そつだよ！やっぱり勝人だったんだ！」

そう言つて理樹は嬉しそうな顔をする。俺はというとその状況についていけず頭が混乱していた。当然だ。まさかこんな所で幼馴染に再開するなんて思つても見なかったのだ

「なんだ直枝と知り合いか？」

教師の言葉で俺はようやく現実に引き戻された

「あつ、はい。幼馴染です」

幼馴染と聞いて教室中から驚きの声上がる

「お前ら静かにしろ。高宮、自己紹介をしろ」

「はい。高宮勝人です。さっきも言った通りそこにいる直枝理樹とは幼馴染です。これからよろしくお願ひします」

「席は直枝の後ろの席がちょうど空いてるからそこに座りなさい」

「はい」

言われて俺は自分の席へと歩いていく。席に着くと理樹が声をかけた

「びっくりしたよ。まさか転校生が勝人だったなんて」

「俺もお前がここにいることにびっくりしてるよ」

「ほら、お前らHRを始めるから静かにしろ」

「あつ、すみません。それじゃ、HRが終わったら残つといて、紹介したい人がいっぱいいるんだ」

「ああ。わかったよ」

そう答えると理樹は前を向き、教師はHRを始めた

第二話 邂逅 リトルバスターズ

HRが終わり、俺は言われた通り教室に残っていた

「で、誰なんだ？紹介したい奴らって」

「あ、うん。ちょうどきたみたい」

そう言われ理樹が見た方を俺もみると、先ほどの大柄の男と何故か制服ではなく袴に奇妙なジャンパーという意味不明な男とあとその後ろに女子が六名いた

「えーと、とりあえず皆に先に紹介するね。僕の幼馴染の高宮勝人だよ」

「？でもあたしらはこんな奴知らないぞ？」

そう言ったのは猫の尻尾を思わせるようなポニーテールをした女だった

「うん。勝人は皆と会うよりも前の友達で、鈴たちとあうちよっと前に引越しちゃったんだ」

「ほう、そうだったのか。HRで理樹の幼馴染と聞いた時は驚いたぞ」

そう言ったのは袴ジャンパーの男だ

「それで、お前の言ってた紹介したい奴らって言うのはこいつらな

のか？」

「あ、うん。紹介するよ彼女は棗鈴。幼馴染で勝人が引っ越したすぐあとに会ったんだ」

「お前目つき悪いな」

「……いきなりごあいさつだな」

初対面の相手にそんなことを言う奴は初めて見たぞ

「ちょ、ちょっと鈴！いきなり何言ってるのさ！」

「いいよ、別に。目つきが悪いのは事実だからな」

初対面の奴に言われるのは気に食わないが

「じ、じめん」

「別にお前が謝る必要はないさ。それよりも他の奴の紹介をまだ聞いてないんだが」

「あ、うん。彼は井ノ原真人」

「おう。理樹のルームメイトでリトルバスターズの筋肉担当だ」

筋肉担当って何だよ！そもそもリトルバスターズってゆうところからもう分からん

「この馬鹿の言うことは無視してくれていいぞ」

そう言うのは袴ジャンパーだ。お前のその格好も相当バカだぞつと言いたくなつたがあとがメンドそうだったからやめた

「こつちは宮沢謙吾。二人とも僕の幼馴染だよ」

「よろしく頼む」

「ああ」

「神北小毬さん」

「よろしくね」

ショートボブの髪型に少し大きめのセーターを着たのんびりとした雰囲気の子。いかにも天然って感じがする

「能美クドリヤフカ。皆クドって呼んでるけど」

「ないすとうーみーとうなのです」

小学生かと思うほどちっこい、そしてなんとなく犬っぽい雰囲気を放っている感じがした

「三枝葉留佳さん」

「やー。ハルちゃんですよー」

特徴的な赤紫色のツィーテールをした騒がしそうな女。目立つ感じなのだがさつき自己紹介に時に見た覚えがない

「つーか三枝、何でオメーがいるんだよ。別のクラスだろーが」

「いやー、理樹君のクラスに転校生が来たって聞いたからダッシュで来ましたヨ」

あー、それか

「来ヶ谷唯子さん」

「気軽に姉さまとでも呼んでくれたまえ」

「いや・・・なんでだよ」

やたらと色っぽい感じの女。本当に同級生なのか疑いたくなる

「西園美魚さん」

「よろしくお願いします」

物静かな雰囲気の良い女。この集りの中で一番まともそうだ

「直枝×高宮……。ありますね」

「ちょっとまで。今不穏当な発言が聞こえたんだが」

前言撤回。こいつには注意しよう

「ここにいるのは皆リトルバスターズのメンバーなんだ」

「さつきから気になってたんだが、そのリトルバスターズってのはなんなんだ？」

「リトルバスターズっていうのは恭介っていう幼馴染が作ったチームなんだ」

「そいつもこの学校なのか？」

「うん。そろそろ来るころだと思っただけど」

「呼んだか？」

声の主は窓から突然入ってきた

この人物と彼らリトルバスターズとの出会いが俺の人生を百八十度変えることをこの時の俺は知る由もなかった

第三話 変わった関係

「呼んだか？」

声の人物は窓から突然入ってきた。その人物が理樹の言う恭介という人物ということは想像に難くなかった

「恭介、いつからそこにいたのさ」

「んー、鈴がこんな奴知らないぞっていったあたりだな」

要は最初からいたんじゃない・・・

「いたんなら何で入ってこないのさ」

「突然入って行った方が面白いじゃないか」

なんじゃそりゃ

「とりあえず自己紹介してよ」

「おう。三年の棗恭介だ。君は確か高宮君だったな」

「はい」

「理樹の幼馴染と聞いたが」

「ええ、まあ」

「部活に所属にする予定は？」

「特には」

「よし。では今日から君はリトルバスターズのメンバーだ」

はい？

「ちょ、ちょっと恭介いきなりすぎるよ！」

「あれじゃあほとんど誘導尋問だぞ」

「だって理樹の幼馴染で部活にも特にはいいいる予定はないんだぞ？
誘わない手はないだろ」

「いやでもまだ勝人の意思も聞いてないわけだし」

「わーっつたよ。君、放課後暇だろ？」

「ま、まあ一応」

「よし、決定だな」

「だーかーらー」

俺を置いてどんどん話が進められていく。でも今俺はそのことよりもある一つのこと意識を奪われていた

(あいつがあんなふうに人と話してるとこ初めて見たな)

理樹は昔から気が小さくて人づきあいも苦手な奴だった。それがあんなふうになんと話している姿には信じがたいことだった。理樹はあいつらのことを幼馴染と言っていたがそれだけであんな風に話せているとは思えない。あいつ自身が変わったのだ。なにが理樹をこんなに変えたのか。それはすぐに分かった

(こいつらか)

こいつらとの出会いが理樹を変えた。以前よりもずっと強く

(俺が腐ってる間にこいつはこんなに強くなってたんだな)

今の理樹は俺にはとても遠くそして眩しく見えた。十年というときはこんなにもあいつを強くした。でも俺は……。そう考えると今の自分がとてもみじめに見えた。だから……

「理樹」

「あ、ごめん。勝手に話を進めちゃって。何？」

「俺は、リトルバスターズには入らない」

第四話 ミッションスタート！

理樹 side

「俺は、リトルバスターズには入らない」

「え？」

その言葉を聞いた時僕は自分の耳を疑った。確かにさっきまでの恭介の勧誘方法はどうかと思っただけどリトルバスターズに入ること自体を勝人が断ると思っていなかった

「ど、どうして？」

「悪い。とにかくそういうことだから」

そう言つと勝人は教室を出て行こうとする

「ま、待ってよ勝人！」

引き留めようとしたら恭介に止められた

「そうか。気が変わったらいつでも言ってくれ」

「ああ」

それだけ言つと勝人は教室から出て行った

お昼休み。学食で恭介たちと昼食をとっている。でも僕の頭は別のことではいっばいで箸は一向に進まなかった

「?どうしたんだ理樹。食べないのか?」

鈴が僕の顔を覗き込むようにして聞いてくる

「あ、うん。食べるよ」

「高宮のことか?」

恭介に的確に言い当てられる。やはりお見通しのようだ

「……うん」

あれから勝人は休み時間になるとどこかに行ってしまったているため口々に話せていない。一体勝人に何があつたんだろう

「しょうがないんじゃないのか?」

「え?」

「高宮とは十年も会ってなかったんだろ?」

「……うん」

勝人が引越した場所は凄く遠いところだったから休みに遊びに行くこともできなかった。それでも手紙のやり取りはしていたんだけどそれも九つの時からすっかり途切れていた

「十年もたてば人の関係は変わる。それがたとえ仲の良かった相手でもな。もと通りという訳にはいかないだろう」

「うん。分かってるよ、でも・・・」

確かに恭介の言うとおりだ。人は変わる。いくら仲が良かったからと言ってもと通りとイカないのもわかってる。でも・・・

「・・・でも、それでも勝人は、勝人に限ってはそんなことないってどこかで思ってたんだ」

「だが現実としてお前は拒絶された。違うか？」

「うん。確かにそうだ。でも、僕にはあれが勝人の本心だとはどうしても思えないんだ」

「何でだ？」

「だって、あのとき勝人は少しつらそうな顔をしてたから」

そう。あのとき、リトルバスターズに入るのを断ったとき、勝人は隠そうとしていたけどそれでも確かに少しつらそうな顔をしていた

「だから、もし勝人が今何か辛いことを抱えているのなら僕は勝人を助きたい。そう思うから」

「だが、仮にそうだとして、あいつはお前がそれにかかわることを望んでいないかもしれないぞ？その時お前は どうする」

「それでもだよ。勝人はいつも僕のことを助けてくれた」

小さかった時気が弱くて友達の少なかった僕の手をひっぱってくれたのはいつだって勝人だった

「だから僕は、たとえ勝人がそれを望んでいなくても、勝人が苦しんでいるなら助けたいんだ。だって勝人は・・・僕の大切な友達だから」

そう。これが僕の素直な気持ちだ。リトルバスターズに誘うことが勝人の助けになるかは分からない。でも今の僕に出来ることはそれだけだ

「そうか・・・」

恭介は僕の言葉を聞くと少し沈黙し、そして言った

「理樹がそう決めたのなら俺たちもそれに協力しよう」

「え？で、でも」

「確かに俺たちは高宮のことを知らないし、どういう奴なのかわからない。だが、たった一つだけ分かっていることがある」

「え？」

「高宮は理樹の大切な友達だったことだ。なら理樹の友達である俺たちがその友達である高宮を助けるのは当然のことだ」

「恭介・・・」

本当に僕は最高の友達を持ったと思う。こんな友達に恵まれて僕は本当に幸せ者だ

「それじゃあ……」

そして恭介が宣言する。いつものように

「ミッションスタート！高宮勝人をリトルバスターズに勧誘しろ！」

第四話 ミッションスタート！（後書き）

大晦日になにしてるんでしょねww

第五話 こいつには言われたくねえー！

勝人 side

転校してきて数日後の昼休み、俺は現在購買で買ったパンを片手に廊下を歩いている

「はあ」

俺がため息をついてる理由、それはほかでもないリトルバスターズだ。ここ二、三日勧誘とやらでやたらと絡んでくる。おかげで教室だとろくに昼飯も食えないため現在落ち着いて昼食をとれる場所を探している最中なのだ

「まったく、何なんだあいつらは」

いくら断つても懲りずにまたやってくる。いい加減諦めてほしい

「どこで食うかな、昼飯」

学食は理樹たちがいるからダメ、裏庭と中庭もリトルバスターズのメンバーがいることが多いし何より人目につきやすい。どこか静かに飯を食べる場所はないのだろうか

「屋上にも行くかな」

この学校は屋上は立ち入り禁止らしいが逆にいえばそこなら安心して飯が食えるということでもある。教師に見つかったら・・・その時はその時だ。屋上に向けて歩を進める。四階の階段を更に上り屋

上のドアに手をかける。だが案の定屋上のドアにはかぎが掛かって
いた

「ま、当然と言っちゃ当然か」

諦めて他の場所を探しに行こうとした時あることに気がついた。屋
上に通じる窓が一つ空いているのだ。ご丁寧に足場になりそうな椅
子まである。そして気になったのは窓の棧にある手のひらサイズの
ドライバーと木ねじ

(他に誰がいるのか?)

まさか自分以外に立ち入り禁止の屋上に出ようとする人物がいると
思っていなかったのでその事実は少なからず俺を驚かせた

(とりあえず出てみるか)

そう思い俺は空いていた窓から屋上に出た。屋上のコンクリートに
足をつけた瞬間上履きがすたっ、という乾いた音を上げる。と、同
時に

バサバサ ズゴンッ

何やらにぎやかな音がした

「なんだ？」

音のした方に向かう、するとそこには給水タンクに潜り込もうとし
て失敗し頭しか隠せていないという何とも間抜けな格好をした女子
が一人いた。っていうか確かこいつ

「で、なにやってんの？お前」

相変わらず意味不明な言い訳をしている神北の声を遮ってそう声をかけた

「は、はい？あれ・・・高宮君？」

「そっだよ」

ようやく気付いたようだ

「実は生活指導の先生で高宮君の声真似してるとかじゃなくて？」

「そんなハイスペックな先生がこの学校にいるならぜひ会ってみようよ」

「な、なあんだ」

「で、ていつか早く出てきてくれないか」

「ふえ？どうかしたの？」

「いや、だからその、見えてるんだよ」

さっきも言った通り今の神北は頭だけを給水タンクの下に突っ込んでいる状態だ。つまり、その、スカートの中が丸見えなのだ。っていつかアリクイってどんなセンスしてるんだ？

「見えてるって何が・・・」

どうやら神北も気づいたらしい

「ほわああああっ!」

ゴスンッ

慌てて出ようとして頭を打つ

「う、うわあーん。に、一回目」

さっきの音はそれだったのか

「えーと、とりあえず落ち着いて出るよ」

「う、うん」

今度は慌てずに出てくる。っていつかこれだけの作業にどれだけかかってんだよ

「で、出られた」

「よじやくな」

俺がそう言くと神北はハッ、と顔をあげて俺の顔を見る。・・・そのまま、数秒

「ああああっ、どどどどじよじよじよ、もうお嫁もらえないーっ!」

いや、お嫁はどっちにしろもらえないだろ。そう思うもいちいち突

っ込んでたらきりがないのでとりあえず落ち着かせることを優先する

「いや、別にそんな気にすることないんじゃないか？」

俺が言うのもなんだが

「え・・・あ、うん、だいじょうぶ、かなあ？」

「多分」

何が大丈夫なのかは全く分からないがあえてそこには突っ込まない

「うん・・・じゃあ、頑張っていていいお嫁さんもらっつよ」

「うん・・・もう好きにしてください」

心の中で突っ込むのにさえつかれた

「じゃあ・・・見なかったことにしよう」

ピッ、と俺を指さしながら言う

「おっけー？」

「あ、ああ、おっけー」

「見られなかったことにしよう」

今度は自分を指さしながら

「これで万事解決だね」

何がだよっ！そう突っ込みたいのを必死にこらえる

「あ、でも・・・高宮君だよね」

「他のだれかに見えるか？」

「何でこんなところ来たの？」

お前らのせいだよ、と言うのはなんとなく悪い気がしたので

「なんとなく」

と答えた

（っっていうかなんとなく立ち入り禁止の場所に来るってどんな奴だよ）

思わず自分に突っ込みを入れてしまう。これではただの変人だ

「ふえ？なんとなくでこんなとききたの？高宮君って、思ったより変ったことする人なんだね」

（そうだけど、こいつには言われたくねえー！）

第六話 やっぱ、変わってるよ

(こいつにだけは言われたくねえー！)

心の中で絶叫する。一応こいつのことを気遣って言ったせりふだったというのにそれでこいつに変な人と言われるのはものすごく納得がいかなかった。なので反撃に出ることにした

「お前もすごく変わってるけどな」

「私は普通だよ」

どこからその自信がわいてくるんだよ、と思うぐらいあっさり返される

「普通は立ち入り禁止の屋上に出たり、給水タンクに頭を突っ込んだりしないと思うんだがな」

負けじと反撃

「あれは慌ててたんだよ」

神北は給水タンクの段差に腰かけた。っていつか慌てて隠れなくちやいけないようなことをしてる時点でどうかと思う

「・・・高宮君、好きな場所ってある？」

「は？」

突然の質問に面食らう

「なんとなく足を運んじゃうような場所。そこにいとすごく落ち
着いちゃうような場所」

「うーん……」

好きな……場所か

「前は……あつた」

「そっか」

俺の言葉を聞くと神北は少しさみしそうな顔をした。いつもとは違
う、こいつには似合わないような少しさみしげな顔。俺がそうさせ
たと思うと少し胸が痛む。神北は少しすると表情を戻しまた話し始
める

「私、ここベストプレイス」

言いながら、足元を指さす

「好きなところだから、ここに来るの。ほら、すごく普通」

いつもならここでそれが立ち入り禁止の場所じゃなかったらな、と
かいうところなのだが、今はどうしてかそういう気にはならなかつ
た。好きなところだから……か

「なんか、いいな。そついうの」

気が付いたら俺はそう言っていた。意識して言ったわけではない。ただ気が付いたら言っていた

「高宮君今は好きな場所ないって言ってたよね」

「・・・ああ」

「なら、見つければいいんだよ」

「え？」

「好きなところがないなら、見つければいいんだよ」

その言葉は俺にとつて、洗礼と言ってもよかった。好きなところがないのなら見つければいい。そんな風に考えたこともなかった。いや、考えることを避けていた。避け続けていた。俺みたいな人にはそんな資格はない、そう思っていた。神北の言葉は今までの俺のそんな考えを一瞬にして吹き飛ばすほどの力があつた

「ここは、どう？」

神北が柵越しの景色に目をやった。俺もそちらを見る。街が見渡せた。ただそれだけのことなのに何故か俺にはその景色がすごく美しく見えた

「悪くはないかな」

「えへへ、気に入ってもらえてよかった。自分の好きなところ、他の人に好きって言ってもらえたら・・・結構嬉しいよね」

神北は嬉しそうに、本当に嬉しそうにそう言った。その顔を見るだけで少し心が安らぐようだった

「お前、やっぱり変わってるよ」

「ふええええっ！なんでー!？」

神北はびっくりしたように言う

「別に悪い意味じゃないよ。ただ、そう思ったんだ」

「そっか」

俺がそう言つと神北は嬉しそうな顔に戻った

「でもね、ここがあんまり知られちゃうと、とっても危険。色々
ね」

まあ、立ち入り禁止だからな

「だからここは内緒なのです」

「ああ、心配せんでも俺は口は堅い」

「これであなたも共犯者」

「物騒だなおい・・・」

「怒られちゃうからね」「」

そりゃそうだ

「あ、一人で出るときはドライバー持ってこないと窓開かないよ」

さっき窓の棧に置いてあったやつのことだろう。やっぱりこいつの
だったんだな。っていうかそんなもんまで用意して好きだからとい
う理由で屋上に出てくる

（なんつーか・・・思ったよりも行動力のあるやつだな。神北って）

神北は段差に腰かけると、あたりにお菓子を広げた

「せっかく来たんだから高宮君もここで食べてきなよ」

そういつて神北は自分の隣をポンポンと叩く。そこに座れというこ
とだろう。こいつも一応リトルバスターズのメンバーなので少し警
戒もしたが

（謀ができるタイプじゃねえか）

そう思い言われた通り隣に座る

「うすしおでもどうぞ〜」

「ああ」

「お茶とチョコパイもありますよ」

笑顔で次々とお菓子を取り出す神北。つーが多い・・・

「私はワッフル食べよーっと」

ワッフルを頼張る

「おいしいよ〜」

神北は幸せそうにそういう

「高宮君にもおすす分け〜」

「いや、俺一応パン買ってきたしそんなにいらねえよ」

「うーん？もうそれだけでおなかいっぱい？」

言われて自分の買ったパンを見る。惣菜パンが一個だけ。授業の間持たすだけならこれで十分だが、腹いっぱいになるかと言われれば答えはノーだ

「いや、そうでもないな」

「うん、じゃあ、あれだよ、ごーですよ」

びしっと指差してくる

「食べてっちゃんいなよ、ゆー」

「あー、じゃあまあ、いただきます」

「うん、風も気持ちいいし、今日も明日もいい天気、きっと」

そんなよくわからない、何の根拠もない理論でもなぜか聞いていると落ち着いた。神北のそんな理論を聞きながら昼休みの時間は過ぎて行った

「ふうー、なんか、食いすぎて苦しいな」

あの後結局俺は神北の差し出すお菓子を全部食べて、正直苦しいぐらいに腹がいっぱいになった。というかこいつはいつもこんな大量のお菓子を一人で食べているのだろうか？そんなに食べていたら体重が……。いや、女子にこの話は禁句だろう

「それじゃ、そろそろもどろつか」

気が付くと授業が始まる五分前になっていた。次は確か移動教室だから急がないとまずい

「ん、そうだな」

立ち上がって出てきた窓のほうに行く。だが俺はそこで立ち止まった

「ん？どうしたの？」

「あ、いや、あのさ」

言おうとして口ごもる。どうにも言い出しづらい

（あーっ！黙っててもしょうがないだろ！）

そう思い、言う

「あ、あのさ、また、ここに来てもいいか？」

身勝手な頼みだとは思う。俺はこいつらがリトルバスターズに勧誘してくるのをさんざん断っているといつらにこっちの頼みだけ聞いてもらおうというのだから。しかし神北は断るところか笑いながらあっさりと

「もちろんですよ」

と言った。その表情を見て俺は再び思った

(やっぱり、変わってるよ。お前)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9543y/>

理樹と幼馴染とリトルバスターズ

2012年1月6日19時47分発行